

「執筆」

新帝展を見る(一)

(29)

厳選とは嘘

中川一政

雪と云ふものを考へてみればおかしなものだ。何も約束したわけではな
いから東京にも一丈位の大雪があつてもよかりさうなものだが、大抵一尺
前後にきまつてゐる。

此前の時は五、六寸ふえたために大雪であつた。此度も大雪になつた。
此前の雪は東都の電車を不通にした外に帝展の搬入日を日延べさせた。
しなければ搬入数が減つたのである。石丸主事が京都まで行つて奔走した
さうである。雪の寸法と同じに何も約束したのではないから減つても差支
へないのであるが、矢張りいつも位の数にしないと気がすまなかつたと見
える。

そして漸く招待日を控へる段取りになつて又大雪が降つたのである。
今日は美術館の家根を四百坪ばかり除雪したさうである。それでもまだ
天井の採光が暗いと写真師は呟いてゐる。私は記事を急がれて、その中を
とぼくと新しい帝展を見て廻つたのである。

陳列法のゆつたりしてゐるのに釣られて一室一室見てまわつて二百十六
点を見終つた時には私は疲れた。疲れから眼がよく働かないのかと思ふ位、
最後の室になるに随つて平調破調の作品が並べてある。

新帝展は厳選だと聞いたがそれは嘘である。搬入数の多いのを願つたと
同様に陳列数をも無理に採用したとしか思へない。

それを好く解釈すれば、平調破調の陳列作品も一時の出来心やスケッチ
程度のものではないのである。どれも自分の力一杯に仕事をしてゐる。そ
してそれがなければ作家は進歩しない。智恵が無いとか技術が足りぬとか、
さう云ふ非難は受けても戦つてゐる事は正直に戦つてゐるのである。

ただ、さう云ふ積極、消極二様の暗中模索の作品は制作ではないから、
さう云ふ作品が沢山ある事は帝展をして私塾の習作展にさせてしまふ。

* * *

新しい帝展は第一回展覧会と目録に銘うつてゐる。その意気に比ぶれば
内容はひどく貧しい。その故は当局の弱気が外見に気を配るからである。
美術館を無理して全部使用する必要は毫もない。使はない室は必要がある
時まで閉じておかまはない。

量を見せる為に質が目立たない。質から見れば決して第一回展覧会は貧
弱ではない。今迄の帝展にこれだけ芸術品並んだ事は或はなかつたかも知
れないのである。

あつた様に見えたかも知れぬがなかつたのである。時々一、二の純美

術品があつたが他は通俗の美術であつたのである。それ等の人が改組に當つて我々は旧帝展に功労があるなどと云ふのである。

純美術の曙光しよこうが帝展に射して来た事、これを以て第一回の誕生とすべきである。

『時事新報』 昭和十二年二月二十九日付

新帝展を見る (二)

(29)

現役の力作

中川一政

運動の選手は記録を破るのである。彼等の一生懸命は自分の記録を絶えず破る事である。

美術家もまた各々自分の記録を持つてゐる筈である。その記録をたえず破つて行くのは現役の選手であつて、自分の記録を破れないのは既にオールドタイマーと目すべきである。

美術の世界では大家は屢々オールドタイマーである。

そして人々は現役選手とオールドタイマーの区別をそれ程痛烈に考へない。

コンデイションと云ふものはいつも悪いものではなからう。誠意さへあれば記録を破る事は出来る筈である。記録を破る事を忘れたカナリヤであつて海へ流してしまつた方がよい。

その中にあつて(横山)大観、(鏑木)清方、(富田)溪仙の如きは大家であつて現役の選手である。

(小川)芋銭や(矢野)橋村や(中村)岳陵や、さういふ人は現役の選手であり乍ながらそれぞれの意味でコンデイションが今よくないやうである。芋

銭は身体がよくない、橋村は隙がない、岳陵は頭がよくない。

横山大観の昨年の《飛泉》は大した評判にも上らなかつたが、あの作品は大観の作品のなかでも傑出したものであつて、大観の生々しい現役性を示したものである。今北画の気魄を求めらるれば大観以外にはないのである。

情緒とか滋味とかを通り越して自然の鬼氣にまで迫つてゐる厳しさは北画である。今度の《龍蛟躍四溟》の如きも出来心や思付きの画材ではなく、なか／＼根強い発想なのを思はせる。虎は見る事は出来るのである。龍は写生するわけにはいかない荒唐無稽のものである。それを引とらへて引きまわすのは大観の気魄であつて雲や波も張りきつてゐる。

玉錦は寄身だけでいつも勝つさうである。

四十八手を自在に使へるのが角力取なら玉錦は角力取でないかも知れぬ。画の四十八手を運用する画家は他にも多いのである。それなのに大観の寄身はそれらを圧倒してしまふ。

やはり大関と云ふものはかかるものではないか。

清方の《慶喜恭順》は歴史画と云ふよりも肖像画として扱ひ方の珍しいものである。

清方を重からしめた先年の《圓朝》はリアリズムの裏打ちのために、油垢まで見られるやうな重厚な印象をうけたが片方は眼、これは頭をたよりにしただけに清楚な印象をうけた。それは描かれる人の人柄にもよる。

清方はいつか卓上美術と云ふ事を書いてゐたが、それもよい事に違ひな

い。しかしかういふ作品の確信を持った線や掴み方の制作をおなほ尊重したいと自分は考へる。

富田溪仙の作品は一種の肩すかしである。負けさうであつてなかなか負けぬ気合が見えて来た。一筆／＼のたらしこみもコンベンショナルではない。生きてゐる。

リアリズムを馬鹿にすると、溪仙は先年の《鳩》のやうに負けるのである。リアリズムが膠になつて溪仙のぼき／＼の線をしなやかにもし、強くもし艶やかにもするのである。 『時事新報』 昭和十一年三月一日付



横山大観「龍蛟躍四溟」図

新帝展を見る(三)

(29)

平調破調の説

中川一政

平調破調と云ふことを云つたが、第一室で説明してみよう。

平調とは技があつて頭の無い事。破調とは頭があつて技のない事である。児玉希望の《枯野》といふ画は場中でも労作であり親切に描いてあり、誰も欠点を見出せないものである。然しかう云ふ画はいつかも見たやうに思はせる。

かう云ふ記録は誰かの記録の範囲にゐるのである。だから調子が低いと云はれる。之が平調である。佐原修一郎の《冬の雨》は左の樹木や全体に技術は素人くさい。しかしその感じ方に驚きがある。その自然に対する驚きを捉へてゐる。畑の刈株や光つた水が生き／＼してゐる。ただ中景などは破綻である。かういふのは破調である。

しかし之は第一室からとつた例だから上等である。後の室へ行つたら出たための平調破調である。

山村耕花や木村武山は仏画を取扱つてゐるが大観が龍を扱つたのとは根底の発想が違ふ。これは古人の記録の中に甘んじて一步も出ようとしない。かういふ技はいくら上手でも武道の型のやうなもので通用しないのだ。

小室翠雲、川合玉堂、橋本関雪のアカデミックの大家ではあつたものである。関雪の仕事が一番張りがある。犬の顔などアカデミックとは云へない。ただ肢体の線を辿つて見るとアカデミックだと思ふ。川端龍子の仕事もアカデミックになるのではないか。便利に筆や刷毛を使ふことを覚えれば誰でもさうなるにきまつてゐる。

矢野橋村の仕事は叮嚀を心懸けてぞんざいになつたものである。左半双は未完成のやうに見える。太田聴雨の《星を見る女性》や山川秀峰の《三人姉妹》のような現代風俗はリアリズムが伴はない為にだん／＼型が崩れて来た。殊に聴雨の望遠鏡を見てゐる女の如きはあべこべに望遠鏡に押されてゐるやうに見える。こんな事を云つては悪いけれども時々には自分の作品を皮肉に見て見るものだ。カリカチュアになつてはゐないか。

太田聴雨 「星を見る女性」



中村貞以の《五月雨》と溝上（小倉）遊亀の《静思》は動勢がよく出てゐる。そして中村貞以は一杯に構図をとり、溝上（小倉）遊亀は中央に重心をおいて屏風構図の張りがあると思ふ。

推奨の奥村土牛の《鴨》は平調破調の難から逃れてゐて未完成のやうだが冴えがある。

田之口青晃の《小春の神泉》も佳作である。ただ鯉のムーヴマンに力が抜けてゐるのはどうか、惜しいと思ふ。

村島西一の《菩薩領》は同じく推奨とあるが自分にはよいと思へない。

この画がある為に自分が疲れてこのあたりの作品のよさがわからぬのかと疑った。再度見に行つても同じ事だつたからかう書くのである。（終）

『時事新報』 昭和十一年三月二日付